

原田 美佳

オーストリア、ウィーンのシェーンブルン宮殿において、日本庭園を偶然発見し、修復し、さらに、新たに枯山水と茶庭の日本庭園を造ったのを皮切りに、ウィーン大学日本学研究所前「青海波庭園」、チェコ・ピルゼン市「翔和苑庭園」、韓国霊岩・王仁博士報恩「神仙太極庭園」と NPO 日本ガルテン協会の原田榮進会長が海外で作庭してきた日本庭園を紹介する。

### (1) シェーンブルン宮殿内日本庭園

#### 日本庭園発見

1996年3月、ウィーンに住んでいた山田貴恵（日本ガルテン協会国際部長）は、佐久間穆ウィーン支局長が訳した P.パンツァー先生らの『ウィーンの一欧州に根づく異文化の軌跡』（1990年、サイマル出版会刊）に出ていた明治天皇が贈られたシーボルトの碑を見にハプスブルグ家の夏の離宮シェーンブルン宮殿に出かけた。

シェーンブルン宮殿は、マリア・テレジアの娘マリー・アントワネットも幼少期を過ごし、モーツァルトと出会ったともいわれており、1814年、第一次世界大戦の戦後処理のためのウィーン会議が行われ、映画「会議は踊る」でもよく

知られた宮殿で、オーストリアの観光名所である。



1920年当時の庭園写真

植物園（パルメンハウス）と動物園の間にあるというシーボルトの碑をさがすうちに、見つけたのはアルペン・ガルテン（アルプス風庭園）と呼ばれる所。一面、蔦に覆われているが、上の方には立石が垣間見られ、「日本庭園のように見える。」

そこで、日本庭園学会員でもある父、原田榮進に「アルプス風庭園と呼ばれている石庭が、何だか日本庭園のようで、ウィーンに来て実際に見て欲しい」と連絡したのが始まりだった。

すぐに原田夫妻は現地に飛び、シェーンブルン宮殿でこの場所をよく見ると、たしかに三尊石組らしきものがあり、日本庭園の痕跡とも思える。そこで、写真を撮り、大妻女子大学で開催された日本庭園学会の際に、日本庭園があるかもしれないので、と数人に調査の提案をしたが、年間 650 万人以上が訪れるハプスブルグ家の宮殿で当時の日本の国際的な立場からも日本庭園が宮殿内に作庭されるはずもないし、誰も関与した記述をみたことがないといわれた。日本庭園であるとの熱心な呼びかけに、現場を観察していた浅野会長の感性からとにかく調査してみても、ということとなった。調査団は、原田榮進を団長に、中村静夫氏（大妻女子大学）、仲隆裕氏（京都造形芸術大学）、戸田芳樹氏（戸田芳樹風景計画代表取締役）、小口基實氏（小口庭園グリーンエクステリア主宰）らで、1996年に現地調査を行うこととなった。

その結果、オーストリア庭園局と連絡・協議を重ね、1920年頃の庭園の写真と手水鉢と思われる石などが見つかり、日本庭園ということが調査の結果、断定された。



#### <決め手となった手水鉢>

これを受けて所管であるオーストリア庭園局の許可を得て、調査、修復事業が行われることとなった。修復を行うに当たって NPO 日本ガルテン協会（会長：原田榮進）が設立され、当時の資料調査などを現地の山田氏を中心に行い、外務省、日本万国博覧会記念協会、国際交流基金をはじめ、日本の京都、大阪、長野、東京などからの 9 組の庭師や現地の多くのボランティアの助成、支援を得て、「シェーンブルン宮殿内日本庭園」の修復が行われた。

調査をしてみると日本人が参加して作ったものではなく、オーストリア側で作られたものと考えられ、見た目は同じでも日本人ならしない作庭方法がとられていた。

そこで、どのように修復すべきか、ということについていろいろと協議が行われた結果、「ヨーロッパの人達を感じた日本庭園を、ヨーロッパの技術で造りあげた庭園」のまま、できうる限り作庭された当時のままに修復することとなった。発見された写真などから石の形、配置された向きなど 2000 個ほどの石をそのままの形に調査しての図面作成などはたいへんな作業となった。

修復だけではなく、庭園局側から要請があり、両側に新たに日本人による庭一枯山水と茶庭のふたつを作庭した。

ウィーンは音楽の都なので、「音」を贈ろうという思いから、石の配置をオーストリアの国歌の第一小節の楽譜にしたり、水琴窟を置いたりと両端の庭に音を表現するものを多く取り入れた。とくに、茶室の一番手前に、静寂を破る獅子脅しが現地の方に好評だった。

茶庭の5メートル程の露地は、地域、経験の違う三人の職人さんが分担し、それぞれ素晴らしいが、同じ日本人作の一本の道でも石の置き方などに技術の違いが感じられた。

シェーンブルン宮殿は世界文化遺産に指定されており、新しい建物には厳しい規制があり、畳を敷けば茶会も可能な四畳半大ほどの土台だけを作った。

開会式では茶会を行ったが、多くの方から日本の茶会はどのようにするのかとの質問がその後も多く、後日、裏千家にドイツ語解説で実演をして頂いた。

垣根は、網代垣、四つ目垣、竜安寺垣、横建仁寺垣、光悦寺垣などを作っているが、総て二重にするなどして作り、「創造建仁寺垣」として日本と異なる環境でも三年に一度行う程度の修復で耐えられる丈夫なものとし、庭園局の日本庭園専任の庭師とともに行き、補修できるように材料も砂利など数年分を置いてきた。

1999年に行われた開園式では、シェーンブルン宮殿日本庭園修復事業実行委員長は鹿取泰衛元大使で、高島有終大使、黒川剛元大使、矢田部厚彦元大使、青木秀西日本新聞会長や佐久間穆朝日新聞元ウィーン支局長、モルタラーオーストリア農業大臣、国会議長らなど両国の多くの方のご出席を得てフィッシャー・コルプリーオーストリア庭園局長と原田榮進会長の挨拶で行なわれた。

開園式後、なぜハプスブルグ帝国の離宮に誰が、いつ、どのようにして庭園を作ったのかに迫ったテレビ番組 NHK-BS 地球に乾杯で「よみがえった日本庭園の謎～ウィーン・シェーンブルン宮殿」も 1999年5月23日に放送された。フランツ・フェルディナント皇太子が日本訪問から帰国後、A.ウムラウフトオース



トリア局長率いる庭師たちが 1913年のイギリスでの国際庭園展示会で日本庭園を見て、ジャポニズムの影響で、ヨーロッパにない庭園であるという感動をもとに造営させたもので、オーストリア＝ハンガリー帝国崩壊後は、多くの庭師たちも世界大戦に参戦、戦死し、庭園は荒廃して、忘れられ「アルペン・ガルテン」と呼ばれるようになった。好評を博し、NHK 総合放送「地球に好奇心」でも放送された。

## (2) ウィーン大学青海波庭園

ウィーン大学には、日本学研究所があり、そこではさまざまな学生が日本について学んでいる。日本学研究所設立 60 周年記念事業の一環として、新校舎正面時計台前に、日本を勉強する学生が日本を考える契機となる庭園として欲

しいと S.リンハルト所長から依頼を受けた。シェーンブルン宮殿の復元作業に協力されていた岸本平晃師匠に作業協力をお願いした。岸本家は、千利休を生んだ大阪・堺の地で代々作庭をされている匠家である。

東洋の陰陽五行説を作庭構想の基本的な一つの柱として考えていたが、作庭現場に案内された時、「5本の松」があったのに驚くとともに、三つのテーマがまとまった。

精神科医であり、歌人の斉藤茂吉氏が昔、ウィーン大学で学ばれた場所だったこと、次女・山田貴恵が学んでいたことなどを考えて要請を受けることとした。作庭に当たり「これぞ日本、学生が何かを考えるインパクトのあるもの、文化交流のモダンなデザイン」の三つのテーマを S.リンハルト所長に提案して了承された。テーマに加えて、音楽の都であるウィーンへの贈り物として、日本の音楽の要素を入れた庭園の構想を練った。

7世紀、当時の宰相であった聖徳太子は、朝鮮半島の百済や新羅、また、中国の隋へ要人を派遣し、新しい知識の導入など国際文化交流を推進された。聖徳太子は、ものの考え方、文化生活様式など日本とは全く違う人々が存在することを認め、相手の立場を理解しようと心掛けることの大切さを、17条の憲法第一条「和を以て貴しと為し、忤（さか）ふることを無きを宗とせよ。」と示された。その聖徳太子の平和希求の心を、青海波庭園のテーマとした。

庭園の名前にした青海波は、その年の歌会始の課題が青だったことにもちなみ、



海景の波の姿を舞曲にした雅楽の名曲で、現在でも最も美しい舞曲の一つとして演奏されている。千年前に書かれた紫式部の「源氏物語」の7帖、紅葉賀では、主人公光源氏が帝の前で、頭中将と青海波模様の衣装をまとい、艶やかに舞い、あまりの美しさに観る人たちがうっとりしたくだりがある。

奈良の3トンほどの大きな生駒石を青海波庭園の主景石に据えた。生駒石

は、黒雲母花崗岩で、酸化鉄分を多量に含み、50年以上自然の風雨に晒されると、ざらざらした石の表面は茶褐色から黒褐色に変化し、黒漆のような独特の黒光りする美しい庭石に変化する名石である。

主景石の滝口からの滝水の流れを受ける青海波の形を造る青石は、厚さ1cm位の阿波産の青石の平板を波形模様に見えるように、青石の隅を丸型にカットして、1つずつ段違いに重ね並べた。それぞれの青石は、清い水の流れで鮮やかな青色を見せながら、流れ落ちる水は石の段差で白い泡が立ち、大海の波

涛の紋様を表すような青海波の美しい模様を創り出す。

学生へのメッセージとして、「楽、空、夢」の3文字を岡山産の白御影石の玉石にそれぞれ一文字ずつ刻んだ。

庭園鑑賞は、先ず楽しむこと、それは、朝夕に変わる庭の様子、そして、四季の変化に満ちた自然の姿のなかに、雪月花の美に添うように設えられた日本庭園を見て、その折々の生活を楽しむ人生を考えて貰いたい。自然の在りようは「空」である。(自己の内も外もエネルギーで充満している)。即、円空の図で現わされる自然の自己の内もエネルギーで充満し、なお、外側もエネルギーは充満している。そして、「夢」のある充実した人生を生きて、その夢が果たされようと、達成されなくても、尽きることのない夢をもってそれぞれの人生を送って欲しい。

こうした、人生への夢と、日本庭園の楽しめる作庭思想、それに、日本の平和を願う臨濟禅の基本思想を表した十牛図絵に示された「空」を、玉石の文字に託したものである。

「青海波庭園」は、キャンパスを大海とし、青海波の流れを京都の白川砂で囲み、金閣寺垣で海に浮かぶ船の形にし、平和の国、日本丸に見立てた庭園とした。海に囲まれた海国の日本丸が、日本文化を満載して七つの海を渡り、ヨーロッパ大陸に位置する海の無いウィーン大学の芝生のキャンパスに、平和を願い、只今到着した」と構想のである。

数年後、日本庭園に関心をもつウィーン大学の学生からの要請があり、どんなイメージでできたのかを含めて、日本庭園とはどんなものかの集中講義を行うことになり、実地の補修作業も行われた。

### (3) チェコ・ピルゼン市「翔和苑」

チェコの西ボヘミア大学の教授であり、山田貴恵氏の友人のホフマン博士が、シェーンブルン宮殿に庭園を作っているときに来られ、「日本の経済学を主体に研究しているが、日本の文化について知りたい。是非、チェコにも日本庭園を作って欲しい。」と要請された。

西ボヘミア大学は、泡の細かいピルスナービールで知られるピルゼン市にある。

ピルゼン市は、1295年に4本の川の分流点につくられた街で、当初、大学を含めていくつかの候補地が挙がった。結局、樹齢400年以上のブナの大樹に魅かれてピルゼン市の心地から1キロほど北西にあり、旧市街地が一望できる丘の動植物園に決まった。

作庭することになってから、まずは、日本人が勝手にモニュメントを築くのであれば、反対という市民もいるということで、どんな思いで、何を作ろうとしようのかを話し合う市民との対話の機会が開かれた。

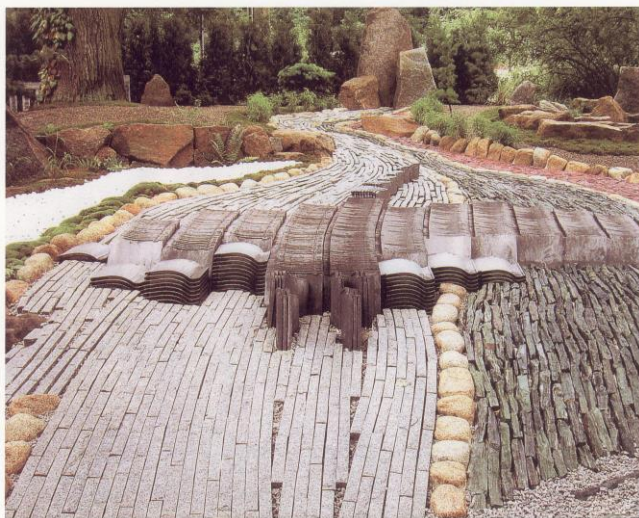
チェコといえば、広島原爆ドームとなった広島産業奨励館は、チェコ人の建築家ヤン・レツル博士設計によるものである。そこで、戦争の悲しさ、虚しさ、残酷さを象徴とした平和のシンボルであり、人を殺すという戦争は、世の中で一番不幸な出来事だと考えていることと合わせて、世界平和を願う意味から原爆ドームに阿弥陀三尊を見立てた三尊石に向かって、銀色に輝く瓦で演出した平和の大鶴が、白道の上を飛翔する姿を構想の基本に、日本庭園の要素とチェコの国の美しい風景をこの庭園に盛り込んで作庭しようとした。

数百年のブナの大樹を囲むベンチにビューポイントを置き、ピルゼンの旧市街の赤い屋根が望まれ、庭全体が一望できるようにした。大ブナの樹に対し、江戸時代に彫られた見返り美人の大雪見灯籠を据え、集まってきた亀たちの繁栄を写しだす産卵の図、清流の傍の蹲踞、手水鉢と、灯籠がチェコの大地と森へ続く背景とした。

「二河白道」の極楽往生を願う白い道と、人間の業が止まない争いの赤い河を赤石で表現し、自然の恵みと恐ろしい災害もある青い流れの現実を青石で表現した。阿弥陀様の極楽浄土の三尊石組へは白御影石で、白道の流れの道を配した。その両端に白のごろた石と緑の丸苔を配した。

波止場から船が出航し、宝物を満載した宝船は、チェコと日本だけでなく、世界へも繋がる島影を安全に航行している。上段には、仙人の棲むという不老長寿の幻想的な雲海を作った。

加えて、源氏物語の源氏香の形の石碑に作庭協力者の名を刻んだ。日本では、漢字からひらがなを発展させ、平安時代には女流文学が顕著で、代表作には紫式部の『源氏物語』がある。これは54帖からなっているが、1から10までたすと55となる。完璧なものから1をひいて54帖とした不完全の美であるとい



われている。『源氏物語』の54の各章のデザインを香の組み合わせの形として取り入れられたのが香道のいわゆる「源氏香」で、なかでも吉祥、大吉を表わす源氏香の形の「初音」を作庭の花押として置いた。

作庭が決まってからすぐに苔を育て始め、竹を栽培するなど日本の植栽への関心も高い現地の植物園の技

術者たちが熱心に庭園を維持してくれている。

日本庭園を遠地に作庭した後は荒れ放題という危惧もよく言われるが、作庭した場合は、事前に一定の材料や補修方法などを伝えるようにしている。

最初の企画、場所の選定、資材の選択などに3年ほどかかり、2004年6月11・12日に開園式を迎えることができた。6月11日は、ピルゼン市博物館のレクチュア会場で、日本庭園についての記念講演会と西ボヘミア大学大講堂での総長主催の文化交流会、12日は、ピルゼン市役所前の共和国広場の特別会場で約2000人を前にしてピルゼン市への庭園の贈呈式、市長からの表彰式や代表者との交流会、市民との茶会や懇談会、博物館では2週間にわたりジャパン・ウィークとして、チェコの建築家ヤン・レツル博士の記録と翔和苑の作庭を中心に、チェコを代表する5人の文化人や原田氏の講演や作品展が行われた。翔和苑の現場でもイジー・シュネーベルガーピルゼン市長、高橋恒一在チェコ日本大使、姉妹都市の松浦幸雄高崎市長やピルゼン市と友好関係のある5か国からのVIPの参加を得て、日本人支援者に対する感謝の数々の行事が行われた。

庭の場合、パブリックな自然空間を作り、その思想を訴えることは、一つの方法だと考えていた。ピルゼン市共和国広場に集まった多くの市民を前にしての「翔和苑」の贈呈式などでチェコの市民に人々を楽園に誘う「天楽」の日本庭園の作庭の想いを伝える機会となった。

#### (4) 韓国・霊巖 王仁博士報恩感謝の「神仙・太極庭苑」

チェコ・ピルゼン市に日本庭園「翔和苑」を2004年6月に作庭し、2005年6月12日に帝国ホテルで「翔和苑開苑一周年記念」の会を開催し、招待したお一人に河正雄氏がおられた。その後、秋に河氏から面会の申し出があり、海外の日本庭園を見て大変感動し、是非、全羅南道の霊岩（よんあむ）にも作庭してもらいたい、と要請された。これまで端緒から完成までに2～3年の歳月を要しているが、翌2006年4月の韓国霊岩・王仁博士文化祭に間に合わせたいということであった。11月に韓国・光州と霊岩に同行して現場を見て欲しい。というのでご一緒した。

現地で人々の王仁博士への崇敬の心を知り、金澈鎬郡守のお人柄とともに役所の人たちの心意気にも感じて作庭の決意をした。

韓国の五千年の歴史の中で、日韓両国は、歴史・文化で深く関わり合い、玄海灘を挟んだ隣国として数千年来、多くの人々が往来し、ともに発展してきた。

全南の霊岩という地は、王仁博士の故郷である。雪岳山からの霊気が、霊岩の月出山に伝わり、文化のエネルギーとして、人々に育まれてきた。そして、その「気」と「文化」が、千数百年前、王仁博士によって、論語十卷・千字文一卷などを日本に伝えられた。大きな示唆を与えられた日本人は、政治や文化面だけでなく、その後の長い歴史の中で多くの面で日本的な開花を成してきた。

高等学校地理歴史科日本史用集には、王仁博士は「5世紀に来朝した百済の博士。論語、千字文をもたらし文筆・出納に従い西文氏（かわちのふみうじ）の祖となる。」とある。

12月には、堺市の駒造園の岸本平晃社長を同行して、王仁博士の墓と伝えられている枚方市の遺跡地を訪ねた。

江戸時代の朝鮮通信使の往来は徳川家康が、対馬の宗氏を介して国交の回復を切望したことに始まる。刷還使から始まった通信使は、江戸時代に全部で12回来日している。500人余の一行は、対馬藩主の案内で途中、各藩の歓迎を受けながら江戸、日光まで旅する。その通信使一行の宿泊先には、各藩の文人、医者、僧侶などが馳せ参じ交流の花が咲き、教えられることが多かったという。対馬藩の通詞として活躍し、学者でもあった雨森芳州は、『交隣提醒』で、誠信の交わりとは、「互いに欺かず争わず、真実を以って交わる」という善隣外交への姿勢がとられた。今回の作庭は、この精神で望むこととした。

日本と韓国との長い文化交流の架け橋となった王仁博士の功績に対して、感謝を込めて「神仙・太極庭苑」を捧げる。



月出山を「中景」とした中に、庭苑文化として、とり入れるようにデザインした。

遠く雪岳山からの「気」をとり入れるといった「遠借」、「隣借」には、王仁記念公園の風景や幾つもの形をした反り屋根のある韓国伝統建築の美しさとバランスを考え、それらに馴染むようにし、360度見渡せる大空を背景に月出山の峰、月の出や雲など四季の風景の変化の美しさを「仰借」として、また、「俯借」としては、王仁記念公園が構想されて配置されている池や多くの建物や韓国庭苑、参道とともに手入れのよい松などの植栽の中にも融合するように配慮した。



現地での工期は一応2週間で一日も余裕がなく、雨の中でも作業する日が続く本当に短期間の作業であった。

11月の下見で準備をお願いした多くの石は、形の違う石の三次元パズルを完成させるように日本で練りに練ってきて、庭に配置するはずの石たちであった。

それを失い呆然としたが、作業者の前向きな姿勢に気をとり直した。

通訳の郡庁観光課の日本人職員生方文代さん、60年ぶりに日本語を話された現地ボランティアの元校長の趙先生、正装をして現場まで従者に神酒と肴を持たせて訪ねて来られた王仁博士顕彰会の会長をはじめ、多くの方々との交流があり、同じ東アジアの国というのは、不思議なほど似かよった心の安らぎがあったことも、新しい発見であり、経験でもあった。

太極庭園では、須弥山の大宇宙マンダラとし、須弥山に立てた中心石の周りに、五方位の聖山である泰山、衡山、嵩山、恒山、華山を置き、帝釈天と大梵天王が護っている。

さらに、海と山が交互に巡る九山八海、塩海へと続く。

喜見城主である帝釈天の住む下に座禅石を置き、持国天、増長天、広目天、多聞天の四天王界を表わす役石は、宇宙の動きに合わせて右周りに配置され、ここを中心に全世界に広がっていくように構想されている。座禅石には諸悪を断じて、仏心を起こさせる不動明王を表し、岬には、礼拝石を置いた。

中心石には、13トンもある巨石を据えた。須弥山の聖なる流れは白玉石で、白川石の大海に注ぎ、その下には滝つぼや滝の落下する水流を二分して変化を与える役石の水分け石を配した。

太極庭苑の南側の庭の稜線は、和歌山産の那智黒の名石を洲浜に並べ、霊岩近くの海をイメージさせる穏やかな海岸線を表わした洲浜とし、土止めと荒海と入り江の変化のため、護岸は呉呂太とし、底は玉石を敷いた。

須弥山のそれぞれの役石には、添え石を置き、基礎は、足が抜けないほどの粘土質を考慮して2000個に近い捨石、砂利、バラス、生コンなどで幾層にも周囲を固めた。

漢の武帝が作った太液池の中に、「鼈（ごう）」の大亀形が造られた。鼈は海中に棲み、背中に霊山（神仙島）を背負うという巨亀で、背の上のものはすべて金で出来ている、極楽世界である。人の願いが叶う世界へと導くが、邪心を持つ人を嫌い、そういう人が近づくと、海に潜ってしまう。ひとたび潜ると3000年は浮き上がって来ないといわれている。鼈の上には、極楽世界の金色の館をイメージして灯籠を配した。この春日灯籠は、日韓善隣友好を願い、朝鮮通信使が往来した江戸時代に作られた約350年前のものである。竿の半分ほどを鼈の背に埋めて織部灯籠の形にし、王仁博士への金色の灯りが点る灯明とした。この灯籠は、増田氏より寄贈されたもので、甲羅は、京都産の「とやま石」と

いう現在、入手困難の名石の黒い川石を使用した。

月出山との融合を考え、幾つか間隔をあけて、庭に馴染ませるように低い智積院垣とし、基礎に丸瓦置き、土留めとして仕上げた。

日韓友好親善の庭というテーマに主眼をおいて作庭し、秋田の角館の天然記念物である「しだれ桜」を庭苑の隅にそれぞれ1本を植え、その周囲はりゅうのひげ、蘭系の葉、芝生などで飾った。

神仙島、神仙思想に基づいて、秦の始皇帝は、仙人が住むという三神島を徐福に探索させ、東海に浮かぶ吉祥の蓬莱、方丈、えい州などを三神島とした。具体的には、決して得ることのできない神仙蓬莱の世界を、漢の武帝は、離宮の池泉の中に神仙蓬莱庭園として造った。唐代に日本に伝えられ蓬莱池泉庭は日本庭園の作庭の一つの根幹ともなっている。

神仙庭苑には、仏教の三尊石組や禅の垂示を表す碧巖石を配した。また、人々の祈る姿を48対の青石で表現した四十八祈願石といった石を配置した。それは、人の立つ位置によって弓形に見えたり、二つの三角形に見えたりするように配石し、見て楽しめるようにした

中央には、荒海を渡る白龍、対馬海峡に見立てた海に姿を現した大青龍、そして、王仁博士墓地の前で身を清めようとする白龍を配した。渡来日の時は玄海灘の荒海を乗り切り、辿り着くのは北九州辺りであったであろうが、天地の使いである2匹の白龍と大青龍に文化の財宝を託した日韓の往来の多さを神仙庭苑で表わした。

大海原は京都産の白川砂で、その海上を大青龍が、白玉の水泡を起こしながら力強く泳ぐ姿を表現した。現地で名工の親方がノミでハツリ、御影石に光反射のきらめきが加わり、手彫りの2匹の白龍に仕上げられた。

王仁博士の聖水のある霊岩の井戸と、天智天皇が身を清めたとされる聖水の出る三井寺の「閼伽井（あかい）井戸」を模した形にし、伽藍石を配した。龍神は水の神である。蹲踞の手水鉢は、名石の阿波青石とし、龍神のために2つの水穴を施した。

神仙庭苑の隅の波止場を模した夜泊石には宝船はいない。しかし、近くに沈むほどに文化を満載した宝船が、島横の海路を平和で安全な航海をしているのが見える。

神仙庭苑の東側にある1本の松の木は、庭苑を月出山に結びつける木で、北東にある玄海灘側の5本の松は、日本の海辺の松原を想わせる群植とし、太極庭苑の松も、王仁公園との融合を考えて、2本松と背景の松群植とした。

「源氏香」の吉祥、大吉を表わす形の「初音」を作庭の花押としている。

<最後に>

以上のように、日本庭園には思想や思いを込めるものであり、原田会長の作庭の基本には、戦争の無い平和な世界への希求で貫かれており、神を迎える清浄、人々の現世での長寿や幸福、来世での安堵への願いなどといった日本人の思想や、雪月花、わびさびといった日本文化を表現している。

また、単なる芸術だけにとどまらず、植栽や石、水など自然に寄り添い、建築や土木、彫刻、茶道などさまざまな要素が融合した日本庭園の空間には、日本文化が凝縮されている。

オーストリアの庭園の庭師たちが見たようにヨーロッパの庭園とは異なり、海外ではなかなか理解されないと思われる八百万の神を信じ、神道、道教、仏教さえも融合させてきた日本人の文化の、いくつもの要素を庭園の中に表現し、人間同士の対話や、共同作業といった交流から作庭してきたのである。

## 原田榮進会長略歴 Eishin HARADA



特定非営利活動法人日本ガルテン協会会長。

1933年、福岡市生まれ。

社団法人日本経営士会正会員、社団法人日本建築学会正会員。

人間行動研究会（HB研）代表として企業で働く人々の心と行動を研究。25年に亘り丸の内「日本工業倶楽部」において、月例会を主宰、月刊誌「HB研レポート」を発行。日本庭園学会正会員。（日本建築・庭園文化と経済のパラダイムの解明）。

1986年、日本建築学会のメンバーとして、ブルガリア世界建築学会に出席。

1970～95年、中国各地、東南アジア、中央アジア、アメリカの他、東欧、北欧をはじめヨーロッパなど世界各地を調査研究。とくにシルクロード、中国へは十数回調査旅行。また、韓国庭苑学会会員として韓国庭園の調査研究にも携わっている。

日本国中の社寺庭園の調査研究と沖縄・石垣島の冊封使や福岡の庭園の調査に従事。

1996年 日本ガルテン協会設立。1999年にNPOとして東京都より認証を受ける。

1999年 オーストリア・ウィーン・シェーンブルン宮殿日本庭園修復、茶庭・枯山水庭園作庭完了、開園式開催。

再発見・修復された日本庭園についてNHK・BS地球に好奇心「甦がえった日本庭園の謎～シェーンブルン宮殿～」(出演)が制作放映される。さらにNHK「地球に乾杯」で再構成、放映され、大きな反響を呼ぶ。

NHKワールド・ラジオ日本（国際放送）で、シェーンブルン宮殿日本

庭園についてインタビューを受け、世界 40 カ国に送信される。  
朝日・毎日・読売新聞はじめ雑誌専門誌に作庭した日本庭園について  
紹介、多数報道される。(日経新聞「文化欄」に掲載)

ウィーン大学日本学研究所時計台前に「青海波庭園」作庭。

2003 年 シェーンブルン宮殿白金の間にて裏千家第 15 代家元鵬雲斎千宗室大  
宗匠による呈茶式、「茶庭」にて一般市民向け解説付きデモンストレー  
ション披露。

ウィーン大学日本学研究所にて講義、抹茶の大デモンストレーション  
会開催。

2004 年 チェコ・ピルゼン市に日本庭園「翔和苑」作庭。

2006 年 韓国・霊岩の王仁博士碑前報恩感謝の「神仙・太極庭苑」を作成。  
感謝碑受賞。

2007 年 堺市南宗寺「曹溪の庭」作庭

俳句「青門」宝塚仁川倶楽部、木染庵の水琴窟作庭

ウィーン市より叙勲

2009 年 日唄修好 140 周年記念開幕式「雅楽演奏と青海波の舞」開催

2011 年 岐阜県立武義高等学校創立 90 周年記念「○△□の庭」作庭

東京都世田谷区に「達磨の庭」作庭

2015 年 京都市相国寺大通院「マイマイの庭 雨垂れの水琴窟」作庭

#### <参考文献>

『チェコ・ピルゼン市 日本庭園「翔和苑」』2005 年、特定非営利活動法人 日  
本ガルテン協会刊

<http://ukr.plzen.eu/international-projects/finished-projects/japanese-garden-showa-en/japanese-garden.aspx>

「特定非営利活動法人 日本ガルテン協会報」

<http://garten.at.webry.info/>

原田 美佳 [はらだ みか]

東京都出身。大妻女子大学文学部卒業。韓国精神文化研究院にて研修。共著書  
に『コンパクト韓国』(李御寧監修)『読んで旅する韓国』、「朝鮮の王朝の美」、  
『朝鮮王朝の衣装と装身具』などがある。80 年代から韓国文化紹介機関である  
駐日韓国大使館 韓国文化院に勤務(2015 年退職)。現在は日本ガルテン協会広  
報部長など。韓国文化体育観光部長官賞ほか受賞。